

教 仁 名 聞

第40号
(発行日)

2014年1月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

比較煩惱を超越する道

江戸時代のような封建社会では、人それぞれの身分とか職業が固定されていたから、「分相応に生きる」ことが余儀なくされていて、他者よりも高みに上がりたいという人の野心はこうした社会の仕組みによってかなり抑圧されていたと思う。

百姓が政治の分野で活躍するとか商売で大もうけをすることも、商人が政治家になって活動することも、あるいは逆に武士が商売をして儲けることも難しかったので、社会内での身分の範囲の中で暮しをする外はなかったであろう。

それゆえ、地位や財産や名誉が上位の者を見てあこがれたり、ねたんだりすることはある程度抑えこまれていたといえよう。

しかるに今日の日本のような自由主義社会では、個人の資質と努力と縁にめぐまられ

ば、一国の首相にもなれ、世界を股にかける大企業の社長にもなれ、ノーベル賞受賞者にもなれる可能性がある。こういう社会的自由は大事であるが、裏から言えば、現代社会はかつてないほどの優勝劣敗の競争社会でもある。私たちは人としてこの世に生まれてから、激しい競争社会に生きざるを得なくなったのである。

このことは個人の心情に「他者と比べ、他者と競い、他に勝れんとし、他よりもより高みに上がりたいという」煩惱が盛んに起こる社会でもある。嫉妬心や優越感や劣等感などが頻繁に起こってくる。こうして上に登る者もあれば、落ちこぼれる者もあり、勝ち組とか負け組とかさえ云われるようになる。当然、経済的な格差も大きくなりそれが広がっていく。

こうした格差社会のゆがみを正すために、いろいろな政策や心理療法などが行われて

いるのは結構であるが、一人一人の中に起こる「他者と比べ、他者と競い、勝れた者や善人をねたみ、そねむ」煩惱から解放されることは非常に難しいといわねばならない。

「他と比較して煩う」煩惱から解放されていく根本的な道は無いかといえ、それは仏教にすでに用意されているといえよう。

というのは、人の素質の優劣や、人間性の良悪や、肉体の美醜や財産の有無などの差異を超越する道が仏道でもある。

仏道は、人が持てる才能や人間的性質や美醜や持てる財貨の有無など、それらを具えたり持ったりしている〈私〉、あの人でもなくこの人でもない個我的な〈私〉、そういう

〈私〉(自我)が否定され超えられていく道である。あの人でもないこの人でもない〈この私〉としてしか生きていけない〈私〉を超越していくことによって、個々の差異による比較煩惱を超越していくのである。

では個々人の差異や格差を超越する道としての仏道とはどういう道であろうか。

それはあの人やこの人に共通し、人そのものの存在基盤となつている「量りなき平等ないのち」そのものであり、その「普遍的ないのちの外にまことの自己はない」と知る、そういう道である。それが仏法でありお念佛の法なのである。

それを身近な物で喩えてみると、花にはバラがあり、すみれの花があり、なずなの花など多種多様な花がある。花

謹賀新年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

土井紀明 中村穂積

土井眞由実 迫田忠夫

宮野勲 中川政二

平成二十六年元旦

ビラそれぞれは大きさや色や形、品種が違う。

しかし、それぞれの花を咲かせている花の「いのちのはたらき」は、平等である。花びらとして咲かせている目に見えぬ量りないのちそのものは平等である。

個々別々の花は、目に見えぬいのちの働きが縁あつていろいろな花となって咲いているといえる。

花ビラだけを見ていると、花それぞれで色や形の差があり見栄えも違うが、花を咲かせているいのちほどの花ビラにも平等に働いている。

あるいは、こどもも譬えられる。大空の気から縁あつて雲が発生する。個々の雲の形は大きさまである。そして雲は大気の湿度によって、現れたり消えたり、時には雨となつて降る。さまざま雲は一時的な仮の事象である。しかし、雲を雲として成立させている気は無量の気と空といつてもいい。

雲はそれぞれの人の譬えであり、気は量りなきいのちの働きに譬えられる。

そのように人それぞれの資質や性格や才能や姿・形は違

つても、人それぞれをあらしめて見えないのちそのものは、目には見えないが、量りなき根源のないのちの働きであり平等ないのちである。

今、阿弥陀仏の本体である寿命無量は、人それぞれのいのちをあらしめて量りなきいのちと別の働きでは無いであろう。その阿弥陀仏の量りないのちこそ、「真実の自己」といふべきものである。

この真実の自己に少しでも気がつくと、個我的な、他者とは区別される自我としての「私」は仮の私であることが同時に知らされる。

ただしかし、その様な真実がほのかに知れたとしても、日常生活では従来の自我が「私」として頑張っているし、そこに深く固執している。実際の生活意識は自我を中心にして生きるしかないのが凡夫のありさまである。

それゆえ、無量寿如来のいのちの喚びかけである南無阿弥陀仏に、つねに私たちが喚びかけられ、いのちの元にそのつど喚び返され続ける念仏生活が大事となるのである。

南無阿弥陀仏は、正信偈の〈帰命無量寿如来〉であり、そのお心を足利義山師は

はかりなきいのちのほとけ

ましまして

われをたのめと

よびたもうなり

と詠んでおられる。

〈我をたのめ〉と喚び続けておられるはかりなきいのちの仏に帰命(信順)するとき、はかりなきいのちの仏にであり、撰取される。そしてそのいのちこそ私の主であり、真実主体であることがほのかに知らされるのである。

こうして、個々の人間的差異による束縛やうぬぼれやねたみや劣等感などの煩惱生活の中に、南無阿弥陀仏の御名を聞くとき、小さな自我としての私に、量りなきいのちとしての平等なる真実の自己をほのかながら知らされ、また知らされ続けていく道が与えられる。

こうした念佛聞法の日々の中で、この感知が深まれば深まるほど、「他と比較して煩う」煩惱から解放されていくのである。

(了)

正信偈に学ぶ問答

(五十九)

だから心が開けたのです。

その後比叡山を下りて、京都東山の吉水で本願の念仏を有缘の人々にお勧めになり、浄土往生の救いの道を万人に開示されたお方です」

N 「本師とは」

D 「真宗の祖師という意味ですが、ここでは特に親鸞聖人の直接の師という意味合いがあります」

N 「法然聖人は〈善悪の凡夫人を憐愍せしむ〉とは」

D 「法然聖人は、善人悪人を隔てることなく憐れんで、一切衆生が共に平等に救われる本願念仏の法をお説きになつた、ということですよ」

N 「善人と悪人を隔てることなく憐れまれたとのことですが、その点をもう少し詳しくお話し下さい」

D 「法然聖人のお言葉に、〈善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、ただうまれつきのままにて念仏する人を、念仏に助ささぬ人

本師源空明仏教
憐愍善悪凡夫人
真宗教証興片州
選択本願弘悪世

(書き下し) 本師・源空は、仏教に明らかにして、善悪の凡夫人を憐愍せしむ。真宗の教証、片州に興す。選択本願、悪世に弘む。

(現代語訳) 源空聖人は、深く仏の教えをきわめられ、善人悪人すべての凡夫を哀れんで、この国に往生浄土の真実の教えを開いて明らかにされ、選択本願の法を五濁の世にお弘めになった。

*

N 「源空聖人はどういうお方ですか」

D 「真宗の七高僧のお一人で、一一三二年、美作の国(岡山県)に生まれ、出家して十五歳で比叡山にのぼって天台宗の修行と学問を修められました。しかし、道が開けず、四十三才の時善導大師の教えにであつて本願の念仏をいた

とはもうすなり。

念仏もうす機は、生まれつきのままにて申すなり。先の世のしわざによりて、今生の身をば受けたることなれば、この世にてはえなおし改めぬことなり。

たとえば女人の男子にならばやと思えども、今生のうちには男子とならざるがごとし。智者は智者にて申し、愚者は愚者にて申し、慈悲者は慈悲ありて申し、慳貪者は慳貪ながら申す、一切の人みなかくのごとし。

さればこそ阿弥陀ほとけは十方衆生とて広く願をおこしませ。とあります。このお言葉は「善悪の凡夫人を憐愍したもう」法然聖人のお心がよく示されています。

N 「この法然聖人の法語の心を話して下さい」

D 「憐愍とは、いつくしみあわれむことです。善人だ悪人だといっても凡夫のお互いは、この世に生まれる前からの宿業によって、それぞれの深い過去の業の結果この世での身を受けたのであるから、自分を善き者に変えて救われようと思っても、この世では（ええなおし改めぬ）すなわち

直し改めることが、悲しいかな出来ない。それが現実の有り様である。しかるに阿弥陀仏は、そういう宿業に縛られている一切の凡夫の身を、阿弥陀仏御自身にまるまる引き受け、重い罪業を浄化して、浄土に生まれさせて浄らかな仏にしてやりたいという広大な本願を起こされました。そして（そのまま念仏申すばかりで、浄土に生まれさせる）とまで誓って下さった。だから

（智者は智者にて申し、愚者は愚者にて申し、慈悲者は慈悲ありて申し、慳貪者は慳貪ながら申す）して、阿弥陀仏に助けられなさいと、法然聖人はお念仏をお勧めになった。そういうお心を「善悪の凡夫人を憐愍したもう」と親鸞聖人はお示しになっているのであります。

N 「善悪の凡夫人とは」
D 「観経に説かれているような、定善や散善などの仏道の善行修行を行う人は善人であり、十悪などを日夜に行う人は悪人と教えられています。しかるに本願の念仏は、そういう人の善し悪し、人の行いの善し悪しでもって、救いの対象を分けず、善人悪人を隔

てなく救いたもうとの思召しです」

N 「私ども凡夫の嘆きは、自分を立派な人間に（直し改めえぬ）ことですね。その悲しみに同感し、このような私たちに大悲をそそぎ、へ生まれつきのままにて念仏するばかりで、浄土に生まれさせよう、仏にしよう」との弥陀の本願はまことに大悲極まりないお誓いですね。その本願を一切の凡夫にお示しになったのが法然聖人なのです」

D 「ええそうです。そういう万人を平等に救う教え、その教えを東洋の片隅（片州）にある日本に明らかに説きおこされました、そのことを（真宗の教証、片州に興す）といわれていのです。教証というのには教えとその教えにしたがえばどうなるかという結果のことで、いわゆる真宗の教法のことです」

N 「では（選択本願、悪世に弘む）とは」
D 「選択本願とは、阿弥陀仏が南無阿弥陀仏の御名を選び、これを（称えるばかりで助ける）という大悲の約束を本願といいます。法然聖人はその選択本願を乱れる末法の

世に命がけでお弘めになったのです」

N 「法然聖人は、厳しい世の中にも関わらず、選択本願を（悪世に弘）めて下さった、そのおかげで私も本願に遇うことが出来た。そういう宗祖の謝念がここに込められているのでしようね」

D 「ええそう思います。ここで宗祖聖人は、法然聖人は念仏をお弘めになったと云われずに、選択本願をお弘めになったと云われるのです」

N 「それはなぜですか」
D 「私たちに念仏を称えさせ、南無阿弥陀仏の名を聞かしめたもうのは、要するに選択本願の大悲心に私たちをあわせようとされるからです。お念仏は私たちに称えさせることが目的ではなく、選択本願の真実に私たちをあわしめんがためなのです。ですからお念仏を弘めると仰せられず、選択本願を弘めたもうと、お念仏の元をお示し下さったのでありましょう」

N 「阿弥陀仏は称名念仏を選択され、そ

の念仏に（称えるばかりで助ける）という誓いをかけて私たちを救おうとされる、その絶大な大悲の働きである選択本願の恵みに人々をあわせたいと願って、法然聖人は（煩悩が深く、いつまでも苦しみ境界から出ることができない私たちすべてに、阿弥陀仏は、ただ称えるばかりで助けると誓って下さった選択本願のお助けがまします」と、この世のあらゆる人々を憐れみ、弘く選択本願の思召しを、お念仏の行において勧めにされたのです。実践的な行のお勧めにおいて選択本願をお説き下さったのです」

(了)

平成26年度御年忌年回表

13712335	周忌 回忌 回忌 回忌 回忌 回忌 回忌	平成25年 平成24年 平成23年 平成22年 平成21年 昭和63年 昭和54年	亡 亡 亡 亡 亡 亡 亡
----------	--	---	---------------------------------

（23回忌と27回忌をせず、25回忌に23回忌を合わせ、27回忌を25回忌と見なす）

木村無相さんの法信 16

(昭和五十七年八月三十日の木村無相さんから私へのお手紙。前月号からの続き)

「善信が信心も、上人の信心も一つなり」という聖人の信心も、

「源空が信心も、善信の信心も一つなり」という信心は、

こうした「他力の信心」その中身は弥陀の「願心」、弥陀そのものであると言つてよく、我れ々々のイワユル、「信じゴコロ」といったものでは無いのですよ。いわば、

「他力廻向の真実信心、即ち願心の廻向、仏智の廻向」によって、

我れは無信なり、

我れは無仏法者なり、

我れは、逆謗センダイなり、

こうした我れは、

ただ念仏のホカは無し

と思ひ知られ、「信知」されるのであるから、イワユル、凡夫の信心は全然イライナイのであると共に、凡夫の自心建立の信心は、ニセ札と同じで、全然、通用しないのです。

他力廻向の真実信心によつてのみ、

ソクバクの業を持ちける身ということも思ひ知らされ、

このような者、このような無信、無仏法、逆謗センダイの身は、ただ念仏のホカは無し

と、信じ、思ひ知らされるのであるから、

普通に、「信心々々」と思つているような信心は、まったくイ

ラナイですよ。天下に通用しない、「ニセ札」が、「イワユル信心」なのです。

ソクナ、ニセ信心をホントーの信心の

ように、思ひ込んで、

「信じられない、信じられない」

と、「苦」にすることはイライナイのです。

そんな、信心は、無い、いらぬ、のであると思ひ知らせるハタラクこそが、「生きたホントウのご信心さま」「信心の智慧」「仏智」なのです。このような「無信」「無仏法」「逆謗、センダイ」の私、ワレワレに、廻向実現し、ハタラクたもう「仏智」を、「信心」と名づけるのであります。

それで、「信樂の体は至心である」というのでありましょう。

「信心マンジュウ」の「アンコ」は、

「中身」は、弥陀の智慧、大悲の願心のことなのです。

それで、「ご信心をいただく」ということの実際は、実質は

「仏智」をいただくこと、「弥陀の切なる願心」をいただくことで、「助けんとおぼしめしたちける本願」のホカに、別製の、「信心」というようなモノガラが、あるのでは無いのですよ。

このことは、非常に大切なことで、ほとんどの、僧俗が、この大切な点を、マチガツテ、受けとつているから、こん日のような、浄土真宗でない浄土仮宗、又は、浄土邪宗になっているのです。

ワレ々々は、浄土仮宗、浄土邪宗に、まぎれこんではならないのです。『歎異抄』の序分に、

またく自見の覚悟をもって、他力の宗旨をみだることなかれ

とあるが、今は「他力の宗旨」を自見の覚悟をもって、「思い乱っている時代」なのです。

ワレ々々は、それらに、思い乱されてはイケナイのです。

私は、法然上人のこと、一遍上人のこと、ほとんど知らないが、親鸞聖人ほど、ワレ々々凡夫の「機の助かりなさ」を、深刻にとつべきか、如実にとつべきか、信知しているお方は無いと思うので、私は、同じ、お念仏のお方であっても、地獄に落ちて後悔しない

と言える、私としての、ホントーの善知識様は、ひとえに「親鸞聖人」お一人なのであります。

その、善知識、よき人の仰せが親鸞におきては、

ただ念佛して、ミダに助けられまいらすべし

とよき人の仰せをこうむりて信ずるホカに別の子細なきなり

なので、「ただ念佛、ただ念佛」と、わが生死の帰依所を、

念仏往生の誓願

ただ念佛

と、いただくバカリなのであります。

昨日、八月三十日(月)の朝、十時から書き出したこの手紙、もうつかれました

たし、書きたいこと書かせてもらったので、これでやめます。

この目、こうして、一日かかって、というか、二日かかっていうか、六十一枚書かせてもらったが、いつ「目」見えんように、書けんようになるかわからんで、これが最後の手紙となつてもよいようにと、今日は今日のお領解のままを思いきり書かせてもらいました。

結局のところ、実に、カンタン、明瞭で、「ナムアマミダブツ」これ一つであります。それも、私が決めていうのではなく、聖人が

念佛よりホカに、生死出離の道なし、ホカに知らず

と仰せられるので、その仰せだけで、私は充分なのであります。

その仰せの通りに、助けて下さるのですか、助かるのですか、私の知らんところでは、

それで、私はいいのです。

ただ念佛してミダに助けられまいらすべし。

の仰せ、善導大師の

若我成仏 十方衆生 称我名字 下至十声 若不生者 不取正覚

との、仰せで充分であります。

これだけにします。今、八月三十一日

(火)朝、六時二十分。太子園に朝食にゆく、七時まで、ベッドに横になって、身心休めます。

よく読んで下さいました。くどくどしく、アツチに飛んだり、こつちに飛んだりする、長い長い手紙を。

(了)